

追手門学院大学スポーツ研究センター

NO.1
2015.11

スポーツ研究センターニュースレター

発刊にあたって

センター開設から1年半余りが経ちました。事業は予定通りに進んでおり、少しずつではありますが、地域や学内の皆さんにセンターの存在や活動を認識いただけるようになりました。今年度は、ビッグイベントの開催はありませんが、昨年度実施した、後援・共催の事業を主催しつつ、コンスタントな事業展開になるよう、計画を進めています。また、活動分野の幅を広げるため、新たに研究員として、高島孝之氏、吉田良治氏、金森喜久男氏に、所員として豊島眞介氏にご就任いただきました。8名の所員と3名の研究員の構成で、各メンバーが事業展開や情報発信等を担当し、スポーツを通じた社会貢献、スポーツ文化の普及につながる活動を展開しています。

今年度6月から、地域連携の取り組みとして、ポッチャ健康サークルを立ち上げました。月2回ですが、地域住民の皆さんとの定期的な交流の機会が得られるようになりました。単発事業を、間隔を空けて展開する方法では、大学（主催者）と地域のみなさん（参加者）との双方向の交流が得られにくいと考え、急遽、事業を企画しました。参加者の皆さ

センター長 松井 健

んの健康づくりやポッチャ競技の普及に貢献することを主な目的にしていますが、他にも様々なプラスアルファの効果があることを、活動を通じて感じています。

秋学期には、セミナーが4件、少年野球・サッカー大会、本学のスポーツ系クラブの学生諸君に協力をいただく、「おうてもんジュニアキャンパス」などを計画しています。ジュニアキャンパスは、学生諸君の指導実践の場にもなる事業ですので、協力クラブと連携して準備を進めていきたいと思えます。

当センターのニュースレターは、年間に2回発行いたします。スポーツ研究センターの活動に関する情報、学内スポーツに関する情報、国内外のスポーツの最新情報や参考情報などをお届けします。今号では、2015年度春学期のセンター事業報告を中心としながら、車椅子バスケットボールで活躍しておられる北間優衣さん（社会学部3年生）の紹介、スポーツコラムなどの記事をお届けします。

今後とも、皆様からのご協力、情報などを当センターに賜りますよう、よろしくお願いいたします。

セミナーの報告 全体テーマ：「スポーツで元気になる、強くなる」

追手門学院大学創立50周年記念事業 スポーツ研究センター主催セミナー

**第1回 「スポーツのケガ（スポーツ外傷とスポーツ障害）
～ケガからの早期復帰を目指して～」**講師：高島 孝之 氏（医療法人高島整形外科院長、日本体育協会スポーツドクター、
サッカーJリーグガンバ大阪チームドクター、スポーツ研究センター研究員）日時：7月2日(木)15:00～16:45、5202教室 参加者：67名（一般13名、学内者19名、学生35名）
後援：茨木市、茨木市教育委員会、茨木市社会福祉協議会

スポーツをする上でのケガは避けては通れないもの。スポーツにおけるケガからの早期復帰を目指すためのポイントやケガの予防方法について、多くのスライドで参加者にわかりやすく、説明をいただきました。高島先生の優しさと熱意にあふれた語り魅了され、あっという間の90分間でした。以下にセミナーの概要をご紹介します。



スポーツ現場で指導するスポーツ傷害（ケガ）はスポーツ外傷とスポーツ障害の2つに分類でき、前者はスポーツ中に、直接外力が作用して生じるアクシデントであり、予防には限界があること、後者はスポーツによって症状が異なり、（その部位を）使い過ぎることによって生じる、予防が可能なケガであることの説明をいただきました。外傷と障害の区別を適切に理解した上で、現場での判断と救急処置について、起こりうる外傷と障害の症状とともに学ぶことができました。

外傷について解説頂いた具体的な項目（キーワード）は、意識障害、外傷性自動症、脳震盪、頭痛、眼外傷、眼窩吹き抜け骨折、頬骨弓骨折、頬骨骨折、鼻骨骨折、下顎骨骨折、歯牙骨骨折、頸椎捻挫、頸髄損傷、局所の応急処置（RICE：Rest安静, Icing冷却, Compression圧迫, Elevation挙上）、筋肉痙攣、創傷処置、打撲、挫傷、肉離れ、捻挫、靭帯損傷、骨折、脱臼、腱断裂、前十字・内側側副・後十字靭帯損傷、メディカルリハビリテーション、理学療法、アスレチックリハビリテーション、現場・競技会への復帰、障害予防、難治骨折診療などです。

このように、頭部から足部まで全身にわたって、順番にわかりやすい説明を頂きました。そして何よりもスポーツ外傷のポイントは、「キチンと早く治す」ことであることを強調されていました。キチンと早く治すためには、（初期治療でうまくいかない場合、）早めに専門医を受診する、

患部を固定して、患部外のトレーニングを早期より開始することが重要とのことでした。加えて、スポーツ外傷を予防するためには、①個人の問題（自己能力の理解不足、悪コンディションなど）、②環境の問題（練習場所、器具、用具）、③練習内容や練習時間の問題などを解決した上で、故障部位の適切な治療を行ってケガを繰り返さないこと、テーピング講習会の受講などが有効であることなど、個人やチームで考慮すべきポイントを教えていただきました。

スポーツ障害については、障害に関与する3つの要因、①個体（年齢、体格、筋肉や骨の素質など）、②環境（サーフェース、シューズ、ラケットなど）、③方法（練習の頻度・時間・方法、休養）について、解説を頂きました。特に、③は、スポーツの指導者に責任がある要因であることを強調されていました。また、熱中症について、症状、応急処置、予防8か条などを確認することができ、（7月の暑い）時節柄とても参考になるお話でした。

スポーツ障害の種目特性として、投げる、打つ、泳ぐ、走る・歩く、跳ぶ、蹴るといった動作別に具体的な障害の解説をいただきました。その中で、特に子供の成長に合わせたトレーニングの重要性を強調され、子どものスポーツ障害予防について、次のようなポイントを具体的に教えていただきました。

- ・十分なウォーミングアップとクーリングダウンを行わせる
- ・運動頻度は、週3～4日まで、1回の運動時間は2時間以内
- ・正しいフォームや反射神経を身につけ、同じ動作の反復を避ける
（野球における望ましい1日あたりの投球量：小学生150球以内、中学生70球以内）
- ・1年中同じスポーツを行わせない
- ・早くからコンディショニングの意識を持たせる
- ・3～5歳は楽しむことが基本、5～7歳は遊ぶことが

基本、8～10歳はスポーツの基本スキルを組み合わせながら楽しませながら運動することが基本

解説をいただいた主な障害とキーワードは、オスグッド・シュラッター氏病、Sinding-Larsen-Johansson氏病、腸脛靭帯炎（ランナー膝）、鷲足炎、膝離断性骨軟骨炎（サッカー膝）、疲労骨折、野球肘（内側型ーリトルリーグ肘、外側型ー本当の野球肘）、メディカルチェック、内反・外反同様性、筋力テスト、突然死、コンディショニング（スポーツを行う上で好ましい状態に体を調整）、リコンディショニング（安静、栄養、十分な睡眠、アクティブレスト、入浴、高気圧テント療法）などです。

スポーツ障害の予防のためには、練習後のストレッチング、スポーツ指導者への（予防に関する）指導が重要であることを強調されていました。

最後に、本セミナーの統一テーマに掲げた「強くなる」を実現するためには、スポーツ医学・科学の知識が不可欠

であると、まとめていただきました。事後アンケートにおいて学生諸君のほぼ全員から「参考になった」との回答が得られたことから、本学のスポーツクラブ強化において、今回のセミナーは大変有意義な講演であったと思います。同時に、日常のスポーツ系クラブの活動において、い



かにしてスポーツ医学・科学の知識や技法を導入・増強していくのが今後の大きな課題であることを認識いたしました。当センターの研究者として、高島先生には、これからも是非お力添えをいただきたいと強く感じたセミナーでした。

（報告：松井 健）

ボッチャ健康サークルの報告

ボッチャはカーリングに似たスポーツで、年齢、性別、障がいの有無を問わず誰もが楽しめるスポーツです。ボールは投げても、くっつけても転がしてもよいですし、補助具を使うこともできます。重度脳性麻痺の人のための種目としてパラリンピックでも採用（1992年～）されています。



このボッチャをぜひ、地域の皆さんと一緒に楽しみ、参加者の方々の健康づくりに役立てるため、2015年6月にサークルを立ち上げました。月に2回、第2、第4火曜日を基本に、大学の体育館で朝8:00～9:00に開催しています。本学近隣の自治会の会長さんをはじめ、20名の皆さんが10月現在、登録されています（加えて学内関係者が6名、合計26名）。20名の皆さんの年齢構成は、60歳代7名、70歳代7名、80歳代6名ですが、年齢を感じさせない、元気



はつらつとしたプレーで、毎回、大いに盛り上がっています。また、回を重ねるごとに技術レベルが向上し、「ミラクルショット」や「勝つための工夫・作戦」が多く見られ

おおさか
まなびの宝
ボッチャ健康サークル
「気軽に楽しく」魅力発信
追手門学院大学
011-722-6011

ようになってきました。参加者の皆さんには、気軽に楽しみ、夢中になれるスポーツとして好評です。簡単なルールだが奥が深い、2～3人のチームで協力してプレーする、軽スポーツとしての効果があるなどの点が夢中になれる要因かと思えます。学生、教職員の皆さんも朝活がてら、ぜひ、ご参加下さい。お待ちしております。

（報告：松井 健）

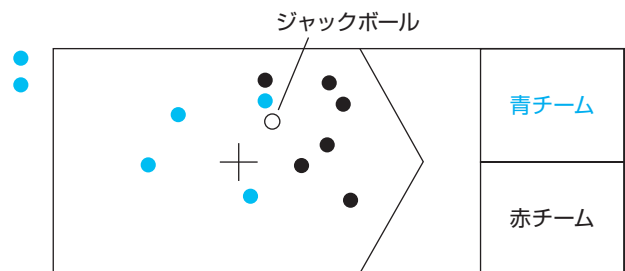
2015年9月12日(土)
毎日新聞朝刊(25面)
(大阪府内版)
(毎日新聞社許諾済み)

参考：ポッチャのルール

- ・ 1対1で行なう個人戦、2対2で行なうペア、3対3で行う団体戦があります。
- ・ いずれも1チーム6個のボール（赤または青）をジャックボール（白）に近づけるよう投げます。
- ・ 投げる順番は
 - ①赤チームの人が最初にジャックボール（白）を投げます（2ゲーム目は青チームの人が投げ、後は同じ要領）。
 - ②続けて、同じ人が赤ボールを投げます。
 - ③青チームの誰かが青ボールを投げます。
 - ④これ以降はジャックボールに遠い方のチームの誰かが投げます。
 - ⑤一方のチームに投げるボールがなくなれば、もう一方のチームが連続して投げます。
- ・ ジャックボールや他のボールにあたってそのまま続けます。
- ・ ジャックボールがコート外に出たとき、ジャックボールはクロス位置に戻ってきます。

・ 得点は

- ①全投球が終わってから、双方のチームの最もジャックボールに近いボールを比較して確認します。より近いチームが「勝ち」となり得点が入ります。
 - ②遠かった方の「ジャックボールに最も近いボール」を基準として、それよりもジャックボールに近いボールの数を数えます。その個数が勝ちチームの得点になります。
 - ③①が全く等距離の時のみ1対1となります。
- ・ 個人戦とペア戦は4ゲーム、団体戦は6ゲーム行ない合計得点を競います。
 - ・ ボールを投げられない人は補助具を使うことができ、また投球に関する介助を受けることもできます。



スポーツの魅力…スポーツが成長産業に！

追手門学院大学客員教授
スポーツ研究センター研究員 金森 喜久男



2014年秋学期から講座『スポーツ概論』を担当することになり、テーマは『スポーツ事業とマネジメント』としましたが、この授業で新鮮な経験をしました。

学生の眼差しは鋭く「いい加減な講義なら聴きたくない」「自分の成長に新しいこと学びたい」との想いが襲ってきました。のんびりした学生もいましたが！

松下電器（現パナソニック）で営業・製造・商品企画・サービス・リスクマネジメントなど幾つかの仕事を経験、2008年よりプロサッカークラブ「ガンバ大阪」で代表取締役を約6年、その間、何時も身体を突き抜くような緊張感を経験しました。

良い製品でなければ、良い保守を提供できなければ、お客様は購入しませんし、また信用を失えば、二度と松下の製品を購入されません。

またガンバ大阪では、真剣なプレイ、優勝を目指す貪欲なエネルギー、新しい選手の育成、地域への貢献などいつも評価され緊張感ある時間を頂きました。

そのような雰囲気を持つ追手門学院大学の学生に「ス

ポーツの魅力とマネジメント」が何かを知ってもらいたい、できれば一緒に研究などできればいいなという思いで大学での活動を開始したのです。

最初に驚いたことは、スポーツの受け止め方です。学問の世界ではスポーツを選択財と位置付けている現状ですが、若い学生たちは必需財と捉えており、時代がスポーツの価値を変化させていたのです。

スポーツの価値が歴史と共に変化しているのは何故か！それをスポーツの歴史、スポーツの持つ特性、観客とスタジアムなどの関連から紐解いていくと、松下電器において実行してきたマネジメント（顧客の創造）の考えと共通していることに気づき、事業には普遍的なものがあると確信するに至りました。

スポーツという言葉は「身体運動の総称」「身体を動かす競技全般」「決められたルールに基づき勝利を目指す競技」として大きく三つに分類されますが、この中で私はスポーツの定義を「決められたルールに基づき勝利を目指す競技」としました。

スポーツの魅力はスポーツの持つ独特な特性によって形成されます。

スポーツには形がありません、「無形性」という特性ですが、これが観ているものに想像力をもたらします。また選手がプレイし同時に観戦するという生産と消費が同時に行われる「同時性」があり、これがチーム・選手と観客の間に一体感をもたらします。さらに選手がプレイする試合はすぐに消え去ってしまう「消滅性」をもっており、それが春に咲く桜のような儚さを感じさせ観客に独特の情緒をもたらします。そして試合は環境や条件が同じであっても毎試合展開は違ってくる「異質性」があり、これが期待と不安を掻き立てます。また楽しさだけでなく苦痛を提供する「多様性」です。観客はハラハラドキドキしながら試合を観、選手との一体感をつくり出していく訳です。このような特性を最大限活かしていくのがスタジアムという舞台になるわけです。この特性を十二分に発揮させることがスポーツを面白くさせていくことになります。

このような考察から自分の基軸を創り上げていく授業ですが、お会いできたら嬉しいです。

〈略歴〉

愛知県名古屋生まれ

- 松下電器産業(株)に入社し、北陸支店長、松下電送システム(株)常務取締役、松下電器産業(株)パナソニックシステムソリューションズ社常務取締役
- 松下電器産業(株)情報セキュリティ本部長として全世界の松下グループ情報資産統括職を歴任
- 2008年4月にガンバ大阪代表取締役社長就任。「お客様の満足」を第一に取組む
- アジアサッカー連盟：プロクラブコミッティ委員長としてアジアサッカープロクラブクライテリア構築
- 2009年より『民間の寄附で建設するスタジアム建設募金団体』を川淵三郎日本サッカー協会最高顧問、下妻博前関経連会長と設立し2015年9月末スタジアム完成し吹田市に寄贈

現役職：スタジアム建設募金団体：代表理事

追手門学院大学：客員教授

Jリーグ：参与

パナソニック株式会社：客員

日本スポーツ産業学会：会員

大学スポーツの未来

追手門学院大学客員教授
スポーツ研究センター研究員 吉田 良治



2014年から早稲田大学がスポーツ偏重と決別し、体育会系団体の学生アスリートの学業成績により、試合や練習参加制限を設け、実社会のいかなる分野においても活躍できる人材育成を目指し、早稲田アスリートプログラム(WAP)を開始した。アメリカでは1980年にアメリカの大学スポーツ初のライフスキルプログラムとして、ジョージア工科大学がトータル・パーソン・プログラム(TPP)を開発し、全米大学体育協会(NCAA)がTPPをモデルに、1991年CHAMPS Life Skills Programを全米の大学へ提供を開始。今では全米中の大学スポーツへの普及に留まらず、一般学生にも21世紀型リーダー育成プログラムとして活用が進んでいる。アメリカのライフスキルの活用開始から34年遅れで、日本でも早稲田大学によりその種がまかれた。しかしそれがアメリカの大学スポーツ(ヨセミテ公園のセコイヤ大森林)のように、日本国内の大学でライフスキルプログラム(緑豊かな森を形成する)を確立するには、アメリカ同様手間暇かけた労力が必要となる。

2015年3月大卒の就職率が21年ぶりに70%(72.6%)

を回復したが、就職率の改善が重要ではない。如何に即戦力で戦える人材が輩出できているかが重要なのだ。スポーツで例えると一番わかりやすい。バットを握ったことのないものを、ドラフト指名するプロ野球球団は一つもない。一から手とり足取り野球を指導する、それも給料を払って育てることなどあり得ない。一般の民間企業もそのレベルで雇用を考えることが重要だ。新卒と言えど入社したら、いきなりバッターボックスに立ち結果が求められる。その準備として大学生の間に、しっかり経験を積んでおく必要がある。日本の企業もそのレベルで人材を選ばなければ、今後国際的な競争の場において、人材レベルの実力差でもっと痛い目にあうであろう。これまでのような新卒一括採用は、今後日本の企業でも見直しが進んでいく。素人を一から手とり足取り仕事を教え、育てる時間も余裕も日本の企業にはないのである。

学生アスリートの多くはプロに進むことなく、一般学生と同じプロセスで社会人となっていく。つまりビジネスパーソンとしての4番バッターになるのである。早稲田大

学のWAPがモデルとしたアメリカのライフスキルの本質は、そのレベルの人材育成を意味する。2020年東京オリンピック・パラリンピックに向け、アスリート強化が叫ばれているが、同時にセカンドキャリアの問題を十分考慮していく必要がある。2007年に大学コンソーシアム京都でライフスキルシンポジウムがあり、パネリストとして参加したアトランタオリンピックシנקロ銀メダリストの武田美保氏は、アメリカのライフスキルの取り組みについて、『引退してからのことを考えるきっかけが欲しいというのが率直な意見。引退後が長いのに“私はこれしか知らない”ということに、危機感を感じました。』（2007年1月23日朝日新聞より）と感想を述べている。日本のアスリートも早い段階からセカンドキャリアを意識して、その準備を始めるべきであろう。

アメリカでは単に学生アスリートへのキャリア支援に留まらず、次の世代へのアプローチも進んでいる。各大学の学生アスリートは年中学校へ出向き、子どもたちに学業の大切さを説いている。またプロアスリートも同様の取り組みを実施している。シアトル・マリナーズの“DREAM Team”はその一例だ。子どもたちは『いつか私も彼らのようになりたい！そのためには勉強が大事なんだ！』ということ意識づけるためだ！と、前阪神タイガースのマット・マートンはこれらの取り組みの価値に言及している。スポーツで成功できるのはほんの一握りのトップアスリートのみだ。そして最初から成功できる保証もない。それは世界中どこにいても変わらない。若年層からのライフスキルは必須である。大学4年間でできることには限りがある。ライフスキルのベースをできる限り早い時期から育てることが重要である。

〈略 歴〉

HRリーダーシップアカデミー トータル・パーソン・プログラム
ファシリテータ

追手門学院大学 客員教授

追手門学院大学 スポーツ研究センター 研究員

・追手門学院大学経済学部卒業

・1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学

・2000年Pac-10 Conference制覇、2001年ローズボウル制覇に貢献

・AFCA（米国フットボールコーチ協会）会員

・大学スポーツのライフスキル指導について、ジョージア工科大学元体育局長ホーマー・ライス氏（元NFLシンシナティ・ベンガルズヘッドコーチ）に師事し、トータルパーソンプログラムの指導法を学ぶ

・ワシントン大学アメリカンフットボールチーム元ヘッドコーチ、ジム・ランブライト氏より国家レベルのリーダーシップ教育の指導法を学ぶ

・2003-2006年、神戸商科大学アメリカンフットボール部コーチ

・2007-2009年、京都産業大学アメリカンフットボール部コーチ

・2010年より日本アメリカンフットボール協会公認指導者研修でインストラクターを担当

・FM大阪と大阪府教育委員会「こころの再生」府民運動の共催番組『みんなともだち』でメインパーソナリティを担当

著書：『ライフスキル・フィットネス：自立のためのスポーツ教育』岩波書店、2013年4月（岩波ジュニア新書 742）

著書：『日本の大学に入ると、なぜ人生を間違えるのか：アメリカの成功者たちが大学時代に学んでいること』PHP研究所、2015年3月

著書：『スポーツマネジメント論：アメリカの大学スポーツビジネスに学ぶ』昭和堂、2015年10月

共著：横山勝彦、来田宣幸 編著『ライフスキル教育：スポーツを通して伝える「生きる力」』昭和堂、2009年10月

がんばる追大アスリート 第1回

飛び出せ世界へ！

車椅子バスケットボール

北間 優衣さん（社会学部社会学科）

追大にはさまざまなスポーツをがんばっている学生が多数います。学外でスポーツ活動に取り組んでいる学生にスポットを当てて、シリーズで紹介いたします。

初回は、2012年のロンドン・パラリンピックの女子車椅子バスケットボールチーム（以降、「車椅子バスケット」）の日本代表メンバーであり、来年のリオデジャネイロパラリンピックでも代表入りを目指している北間優衣さん（社会学部社会学科3年生）にお話をうかがいました。



—車椅子バスケットを始めたいきっかけについて聞かせてください。

北間：もともと体を動かすことが好きだったんです。中学の時、バスケットが好きだから顧問の先生に「バスケット好きなのでバスケット部に入ってもいいですか」みたいな感じで聞いたら、その先生が、すごい先生で、「ああ、全然入っていいよ」と。他の子たちと一緒にバスケットするのは無理やけど、できるメニューとかは一緒に入るという形で、半マネージャー、半選手みたいな感じで活動していました。

私の地元は伊丹市なんですけど、男子の車椅子バスケットのチームがあるんです。顧問の先生がそのチームが主催している大会にバスケット部全員連れて行ってくれたんです。「か

たちは違う車椅子バスケットやけど一緒にバスケットという名前のスポーツ。見に行ったら何か得るものがある」ということで。この経験が一番のきっかけです。「やってみたい」ってもちろん思ったし、顧問の先生も「バスケットが好きで、できひんって状況の中でもバスケットに入ったんやから、車椅子バスケットをやってみれば」と勧めてくださったので、始めることにしました。

―車椅子バスケットのおもしろさって、どこにあると感じていますか？

北間：一つのボールじゃないですか、バスケットって。それをリングに入れるためにみんながタイミングを合わせる。シュートの成功率を高めるためにフリーの人をつくれるよう、みんなで頑張るんですよね。車椅子バスケット、個々のプレイヤーに持ち点がついているんです。1から4.5点まで0.5点刻みになっています。わたしは1点のプレイヤーなんです。ゲームに出る5人の合計が14点以下でチームを組まないとダメなんです。ゲームの中で障害の軽い4.5点の選手と障害の重い1点の選手がぶつかるミスマッチって状態を味方に有利なようにみんなで連携しながら作っていく。ここが車椅子バスケットの面白いところって思っています。

―車椅子バスケットのむずかしさって、どのあたりに感じますか？

北間：むずかしさのひとつは、ゲームの中でのプレーのタイミングの合わせ方ですね。健常のバスケットとちがって車椅子バスケットはジャンプや横の動きがないんです。前進しかないからプレイヤー同士の連携が難しいって、すごく思うんですよね。あとはスペースの取り方ですね。バスケットボールのコートに車いすが10台あったら、きつつきつ



じゃないですか。「狭っ！」って感じ。リングの近くに密集してしまったらそれだけでシュートが打たれへん。かといって、散

らばってスペース空け過ぎてもディフェンスは（オフenseに）楽に抜けられてしまうし。常に視野を広くしながらプレーしなアカンっていうのが難しいなあって、経験を積めば積むほどすごいと思います。

―追手門学院大学を進学先に選ばれた理由って、何ですか？

北間：そもそも、私が大学に行きたかった理由はバスケットをしたかったからなんです。4大に行きたかったっていうのがとりあえずあって。というのも、4大に進めばちょうど4年生の時にリオデジャネイロパラリンピックが来るんで

すよね。4大に行けば仕事をしてない時間を自分でつくれる。その大学の4年間を大事にしたいと思ったんです。

―追大での学生生活はどうか？

北間：友達もたくさんできて楽しい大学生活を送っています。何よりも、これだけバスケットができているのは追大だからこそかなあと思っています。他大学の友人とか見たら、「単位がやばい」とか。私は合宿や遠征でけっこう休ませてもらっているんです。でも、（課題レポートなどの配慮をいただいて）今まで1科目も単位を落としてないんです。それは追大やからできたことなのかなあ、っていうのはすごく思います。

あと、シンクロとかの日本代表選手がいるとか大学案内に書いていたし、垂れ幕も見ました。そういう選手がいるということは、追大はスポーツ活動に理解があるのかなって思ったのも、追大を選んだ一つの理由ですね。

―なにか大学に望むことはありますか？

北間：10月の大会に向けて体育館でシュート練習などをしていきたいので、空いている時間に使わせてもらいたいです*。

―最後に、今後の抱負を聞かせてください。

北間：今の目標は、もちろん、10月10日から16日に千葉県のポートアリーナで行われるリオデジャネイロパラリンピックの予選、三菱電機2015IWBFアジアオセアニアチャンピオンシップ千葉で優勝することです。ここで優勝しないとリオパラへの出場権はないので。そして、リオパラでメダルを取る、というのがチームの目標としてあります。とにかく、その目標に向けてしっかりやるだけですね。

今、東京オリンピック・パラリンピックが決まってから「東京、東京、東京」ってすごく言われるんですけど、競技をやってる人たちにしたら東京だけではないんです。そこだけ注目されちゃうと「リオもあるのに」ってなっちゃうんで、今はリオのことしか考えてはいないです。

―ありがとうございました。これからのさらなるご活躍を楽しみにしております。

※インタビュー後、学生課にこの話をしたところ使用できるようになった。

（2015年9月3日に実施。聞き手：スポーツ研究センター 草山太郎所員・松井センター長）

2015世界水泳(シンクロ)を振り返って ～追大卒業生(2名)の活躍～

スポーツ研究センター 異 樹理 所員

7月25日、ロシア・カザンで開催されたFINA世界水泳選手権大会(以下世界水泳)では、日本シンクロ8年ぶり(世界水泳4大会ぶり)のメダル奪還など、次年度のリオオリンピックに向けて世界に「日本シンクロの復活」を強



烈なインパクトで与えられた価値ある前年戦であった。これには、やはりメダル獲得の立役者である井村雅代ヘッドコーチが10年ぶりに日

本シンクロの指導復帰、この存在・戦術が見事であった。

今回の日本チーム選手10名には、吉田胡桃選手(2014年国際教養学部:アジア学科卒)と中牧佳南(2015年国際教養学部:英語コミュニケーション学科卒)の2名が在籍しており、チーム競技3種目(テクニカル・フリー・コンビネーション)共にレギュラーで出場している。2人はチームの主力選手にまで成長しており、吉田選手においては体格・パワー・瞬発力が評価され、現在はリフト(水面からの持ち上げ動作)の土台ポジションには外せない選手である。こういったポジション取りは非常に重要であり、コーチが最終的に出場選手を選抜するにあたり絶対的な存在になることが選手達の願望である。

今大会の最大のライバルは急成長しているウクライナであった。それにロシアで開催されることで若干ウクライナ

が有利かと予想していたが、壮絶な3位争いの末、日本シンクロの同調、技術面(完遂度)で高く評価され、デュエットFR(フリールーティン)以外見事にウクライナに勝利し4個の銅メダルを獲得した。選手とコーチ、スタッフのメダルへの強い執念で勝ち取った感動のメダルであった。

今大会は選手自身も成長を実感したようで、吉田選手より世界水泳出発前に「今回は自信があります。良い仕上がります!」という力強い言葉通り、肉体改造と体力強化を図り、この1年間の練習量と質の良さが脚1本水面から上がった瞬間に直ぐに理解できた。また、帰国後の中牧選手からは「勝つ喜びを初めて知りました」とメダルへの喜び、そして大会は戦いであることを改めて実感したように感じた。

現在は、その先(上位)の中国を捉えた戦術が始まっており、次年度のリオオリンピックに向けた過酷なトレーニングが始まっていることでしょう。

現在の日本水泳連盟シンクロ委員長は追手門学院大学前中等学校卒業生である本間三和子先生(現:筑波大学教授)であり、スタッフ・選手も含めて全力で応援したいと思います!がんばれ日本!!

※写真提供:本間三和子日本水泳連盟シンクロ委員長



センターからのお知らせ

今年度開催している5回シリーズのセミナー「スポーツで元気になる、強くなる」第4回、第5回申し込み受付中

第4回

「トレーニングの理論と実際 ～トレーニングとは?～」
講師:田中 淳也氏(追手門学院大学トレーニングセンター「追fit」チーフ・トレーナー)
日時:2015年12月10日(木) 15:00~16:30
会場:追手門学院大学トレーニングセンター「追fit(オيفィット)」
定員:先着20名

申し込み方法

参加を希望する回、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、電話番号、所属またはご職業、年齢(何歳代)等を記入のうえ、メールまたはFAXでお申し込みください。申し込み受付後、電子メールまたはFAXにて受講票をお送りします。当日ご持参ください。
申込先:追手門学院大学 スポーツ研究センター E-mail sports@otemon.ac.jp FAX 072-641-9695

第5回

「今から始める誰でもできる実践スポーツ栄養学
～効率的なタイミングから具体的な料理まで～」
講師:野草 礼子氏(管理栄養士。非常勤講師として大阪産業大学「スポーツ栄養学」等を担当)
日時:2016年1月19日(火) 15:00~16:30
会場:追手門学院大学6号館 6103教室(予定)
定員:先着50名

追手門学院大学 スポーツ研究センターニュースレター No.1

◆ 編集・発行 2015年11月30日 印刷
2015年11月30日 発行

◆ 編集代表者 松井 健

◆ 印刷所 川西軽印刷株式会社

◆ 発行所 追手門学院大学 スポーツ研究センター
〒567-8502 茨木市西安威2-1-15
電話 072(641)9690 / FAX 072(641)9695
E-mail sports@otemon.ac.jp
https://www.otemon.ac.jp/research/lab0/csr/